

群疑論に現れたる凡入報土論に就て

近 藤 信 行

(36)

群疑論の著者懷感についての伝は詳かでない。生年月日或は歿年月日共に不明。然し乍ら假は唐の長安十福寺に居住していた事は宋高僧伝才六、仏祖統紀卷第二十七、或は生年西方淨土瑞応刪伝異によつて明らかにする事が出来る。而して又彼は法相唯識の大家であるとする説が現在の學者間（例へば三階聖研究の矢吹夢禪先生或は岸信玄僧正）に於ては云われているが然し乍ら此の説は推定であつて断定的なものではない。何故ならば前述の三つの伝記には假が法相教義に親しんだ事は何もふれていないが、智叡の「夢中松屋論才三」（純淨全才四）に懷感を以て玄奘三藏の門人、達磨七十二人の隨一であるとして推定しているのに基いたものと思はれる。又宋高僧伝及び瑞応伝によつて善導大師に合つた事がつまみらかにされ、彼は台尊の門に入り三年間淨土教を研究し三昧を証得した。そして「群疑論七卷」を述作した。彼はそれ以外にも「觀無量壽至疏二卷並に玄義二卷を述作した事が東域伝燈目錄（卷上）に記されているが、それによると懷感の懷の字が恵になつてゐるので學者間に於て異論がある様である。然し乍ら現念な半に現在その書物が伝わつていないので、何も云う事が出来ない。又彼については我が宗祖法然も選拔集十六章段及び和語燈錄卷五に天々誦れて居られる。今迄の事で大体解せられると思ふが台尊の弟子或は玄奘三藏の門人であつた事から、又武周刊定目錄にその名を列せる

串（矢吹氏三階教の研究 一〇四頁）によつて凡そ唐の玄宗、中京頃の人と推論せられる。（西
 暦七〇〇年頃）。

以上略伝については簡単に述べておいて、これから本論に入つて行きたい。

支那仏教史をひもといて見ると、陳、隋、唐初以来揚論及び三階等の諸宗が大いに教勢を張り、凡天の淨土往生に明して多種の疑難を擧げ、又玄奘によつて法相唯識等の諸論が訳出せられ、新に淨土の群疑が起つて来る様になつたのである。斯くの如く周囲の情勢に鑑み衆生をして淨土往生を勧はしめんとしたのが本論である事は云ふ迄もない。當時に於ける淨土教の問題は何と云つても仏身仏土論と凡天往生説との二つにあつたと云つても過言をばない。それ故懷惑も又卷頭より仏身仏土論を論究し次いで凡天能生を決してゐるのは實に必然的な成り行きであると思ふのである。この様な立場から論を進めて行きたい。

さて懷惑は仏身を、(一)法性身 (二)受用身 (三)變化身の三種に分ち夫々の仏身の身上を (一)法性土 (二)受用土 (三)變化土の三土に分類してゐるのである。而して (一)法性身（法身）は法性土に居し、(二)受用身（報身）は受用土に、(三)變化身（応身）は變化土に天々居すとしてゐる。此の中 (二)の受用土を (四)自受用土と (五)他受用土の二土に分けてゐるのである。

(一)の法性身土を説明して「覺性の義なるを以て身と名づけ、法の真理の体を土と名く」と云い、(二)の自受用身土を説明して菩薩八万四千の微細密の行を習したる果徳等を以てその体とし、仏と仏とのみ能く知見し給う、(三)の他受用身土とは初則以上の諸大菩薩の爲に現するを体とする。(三)の變化身土とは地前の菩薩、二乘凡天の爲に其の所応に従つて現するを變化身土の体性となす。今圖示すれば

(一) 法性身 (法身)

法性土

(二) 受用身 (報身)

① 自受用身 (報身的法身)

自受用土

② 他受用身 (報身)

他受用土

(三) 変化身

変化土

凡夫である所の衆生が生ずべき西方浄土は他受用土と変化土であるとしている。

即ち群疑論第一卷(四誤一切至二頁)に

「向ふて曰く、此の西方極樂世界は三種の中には是れ何れの土の據を、紙して曰く、此に三級あり、一には是れ他受用の土なり、二には唯云ふ変化の土なり、三には二土に通ず、地前は変化の土を見、則ち他受用の土を見る、同じく其れ一應なれども各自心に随つて所見各異なる故に二土に通ず」と。

此の受用身の内、自受用身は報身的法身であり、他受用身と云うのが初地以上の菩薩の爲に顯現し説法教化し給う所の仏身で利他の報身である。斯くの如く彼が弥陀の浄土を判じて唯報の義に於て他受用土即ち報土と判せしは、師治尊と同じであると云う事を得る。

即ち治尊が観至疏玄義分(淨金ニ、一〇下)に

「向ひて曰く、弥陀淨土は、將た是報なりや、是化なりや、答へて曰く、是れ報にして化に非ず、いかんが知る事を得る、大衆同住至に説くが如し、西方安樂の阿彌陀仏は是れ報仏報土なり」

と記せし文義によりて明かなる如く、師治尊の教旨を継承せしものであると思はれる。

斯くの如く懷惑は弥陀の報土を判じて報土となせしも、その深義に於ては正尊の眞實報身土の義とは少しく内容の趣きを異にするものと思はれる。

即ち詳論論一に（因訳一切五、三頁）

「同じく其れ一処なれども各自心に隨つて所見各異なる故に二土に通ず」

と云う文、及び（同上本 頁三四）に

「彼の地前の菩薩、聖凡、凡夫は未だ遍有眞如を証せず、未だ人法を断せず、識心劣なるを以て所變の淨土、地上諸大菩薩の淨土に同じからず、以下略」

或は又（同本 頁五〇の四）に

「又縱令い地前菩薩等は自識の相分を以つて云々」

等と云つてゐる事から照らして見るに、凡夫の生すべき淨土を報土と判じてゐるのではあるが自識に依じて所現する所の報土であると云ふが如くに説証してゐるのである。この處が彼の法相唯識的なる見解の相違点であり、師台尊と相反する立場なのである。

而らば凡夫が報身報土に生じ得るとするなれば、有漏たる凡夫が、無漏である所の仏の淨土に生ずる可能が認められるのであるが、これに關して彼は、仏心無漏なれば如來土も亦無漏なり、而れども凡夫の心は有漏なり、故に有漏土に生ずべきなり、而れども如來の無漏の土に託して受現するを以ての故に仏の無漏に似て生ず衆過なしと論破してゐるのである。又淨土を判じて自心所變の有漏の土であり、是等欲色二界の覆にして三界の概に非ずと説証してゐる。

（同本 頁六）に

「凡夫の心は未だ無漏を得ず、彼の如來の無漏の土の上によつて自心受現して有漏の土に生ず」

と云い（同本、頁六の四）に

「一には有漏の浄土は是れ欲色界の擾なり 中略 吾し未だ欲界の欲を離れず、欲界生得の善の或は方便善を以て大衆方至典を説誦し三福の行又は十六観等を修して此の台根を以て浄土に生ず、此の心の所現は即ち欲界の擾なり、吾しすでに欲を離れて色界の心を俾て十六観を修して浄土に生ずれば即ち色界の擾なり、故に彼の浄土は欲色二界に通ず、無色界の衆生は、実の色界にして浄土に生ずべきなし、浄土は是れ空近思なるを以ての故に實に無色界の擾に非ず 中略 此を以て通知するに彼の浄土の有漏心の所変は即ち欲色二界の擾なり」

今身心所変と云ふ事を云ひしが、これは自識心の浄、穢に従つて現する所の浄土の相も浄、穢を現する事を意味するのである。是、是心作仏 是心是仏なる唯識法相教義の理趣より未たりし考へ方ならん。

而るに（同本、頁一三（六））には

「極樂世界には唯浄土のみ、彼の方処には穢土の相なし」

と云う文あり、さて上座の文義と先の文義との両者を比較して見るに、一見矛盾せるものの如くに思はれると云へども、これに關して彼懷惑は次の如くに説明を加へしなり 即ち

（同本、頁一五——一六）に

「一心の上に種々の淨穢等の相ある事は心に多くの功能あるを以て能く衆多の相を現するなり 中略 又本願を以て衆生に与へて浄土を現する事をなさしめるに由る、衆生仏所に當りし大願を生じて深く穢心を厭うて清淨の行を修する事あり、彼の如來の相の上に詔すれば

是れ有漏なりと云へども彼の清淨の仏土を現する事 中略 今此の淨土に生ずる事を得るものは是れ諸仏の力なり」

と説き、諸仏の力に依りて、即他力を増上縁とするが故に有漏の心をして淨土の相を現せしむるなりと云へるものの如し。

かくの如くに懷愚は弥陀の身土を明し、凡夫の所生たる西方淨土につきて理論的説明を施せしが、然らば凡夫は斯かる西方淨土に如何なる工夫をなして往生を可能ならしむるであらうか。今此尊の觀至玄義文を觀るに（淨土宗聖典 頁三七九）に

「信を生じて疑なれば仏の願力に乘じて悉く生ずる事を得」

と云い、又（同本 頁三八八）に

「正しく仏願に託して、もて強縁となすに依つて五乘をして悉く入らしむることを致す」と唱道せられ十惡五逆の者も尚ほ彼の仏願力に依りてその淨土に生れる事が出来る事を強張せられ、凡入報土を可能ならしめられたのである。

かかる教説を此尊より受けついだる懷惑も、果たして群疑論中に（因訳一切至五 頁三）に「紙して曰く、彼の equal 前の菩薩聖門凡夫は未だ斷滅真如を証せず、未だ人法を斷せず、識心劣なるを以て所受の淨土地上諸大菩薩の淨土に同じからず、然るに阿弥陀仏の殊勝の本願の増上縁の力を以て 中略 微妙廣大の清淨莊嚴も亦見ることを得せしめ給ふ」

と云ひ、又（同本 頁五二）に於いては

「又他受用の土は本願あり、其の本願に乘じて凡夫生ずる事を得る」

等を列ねて阿弥陀仏の四十八願を強張してゐるのである。而してその故に世上の菩薩の所文の

淨土に相似せる微妙莊嚴の世界を变现する事を得ると説いて願力特勝説を提唱しているのである。猶この外念仏論があるが次の稿に廻す事にする。

以上述べて来た事を要約するなれば、凡夫が往生し得る西方淨土に他受用土の变化土の二種ありとし又阿耨相通する所ありとなし、而して仏心は無漏清淨であり、所現の三土も又三界に非る所以を明し、且つ他力の勝縁を認めて凡入教土の思徳を許せども、純正の淨土に生ずる事は出来ぬ。即ち如来の土は無漏なるも、凡夫は自心所変の淨土に生じ之を受用するの故より云へば有漏の淨土に生じなくてはならぬとするのである。即ち凡夫は阿彌陀仏の本願を増上縁とするが故に地上の菩薩の所変の淨土に相似せる微妙莊嚴の世界を变现する事を得るとするのである。

以

上